

〈論文〉

キャロライン・ロビンズの生涯と仕事¹⁾

田中 秀夫

要旨 経済学者ライオネル・ロビンズの妹キャロライン・ロビンズはアメリカで活躍した政治思想史家で『18世紀のコモンウェルスマン』という共和主義研究の名著の著者として知られる。しかし、日本では本書は必ずしもよく知られているわけではない。自由主義と民主主義が頻繁に話題となる日本では共和主義は埋もれた思想である。筆者は本書の邦訳を準備しているが、なぜ本書が目すべき業績であるかを、説明しておこうと思う。18世紀の英国のコモンウェルスマンとはどのような思想を主張したのかを本書は系統的に初めて解明したものであり、そのようなものとしてポーコックの『マキアヴェリアン・モーメント』(1975)を画期とする共和主義研究の基礎を提供した。今日の共和主義研究の隆盛はロビンズの遺産に多くを負っている。

キーワード キャロライン・ロビンズ, コモンウェルスマン, 共和主義, 自由主義, モールズワース, ベイリン, ポーコック, カントリ・イデオロギー, 非国教徒, 自治, 独立, 徳, ライオネル・ロビンズ

I

政治思想史の分野における不朽の名著『18世紀のコモンウェルスマン—チャールズ2世の王政復古から13植民地との戦争までのイングランドの自由主義思想の伝播, 発展および状況の研究』(*The Eighteenth-Century Commonwealthman*, Harvard U. P., 1959)の著者として知られるキャロライン・ロビンズ (Caroline Robbins, 1903-1999) は、有名でありながら、わが国では本格的な紹介がない。筆者は『18世紀のコモンウェルスマン』(以下『コモンウェルスマン』と略記)の邦訳の出版を予定している。それはなぜか、そしてキャロライン・ロビンズがどういう学者であったか、本稿ではいささか詳しく紹介したい。

プリンマー・カレッジの教授として

彼女は1929年から1971年まで42年間にわたり、アメリカ東部女子大の名門として知られるプリンマー・カレッジ (Bryn Mawr College) ——それはわが国の最初の女性留学生となった津田梅子が1889年から3年間留学したカレッジでもあった——の教授を務めた人である。1999年まで生きたから退職後も長い人生であった。彼女の仕事には、本書以外に17世紀のイングランドの共和主義者であるヘンリー・ネヴィルとウォルター・モイルの著作を編集し、長文の序文を付けた『イングランド共和主義二論』 (*Two English Republican Tracts*, Cambridge University Press, 1969) と『絶対的自由』 (Barbara Taft (ed.), *Absolute Liberty: A Selection from the Articles and Papers of Caroline Robbins*, Archon Books, Hamden, 1982) があるが、それ以外にも、彼女は多くの論文、書評、そして説教などを残している²⁾。彼女の個別論文には珠玉のような秀逸な作品が目白押しである。そのうちの重要な論文の多くは『絶対的自由』に収録されている。それ以外に『ジョン・ミルウォード郷土の日記』があるが、これは彼女の最初の編著である (*The Diary of John Milward, Esq. : September, 1666 to May, 1668*, edited with some notes and an introduction on his Life by Caroline Robbins, Cambridge University Press, 1938)。

彼女は1958年に「中部大西洋ルネサンス会議」 (Middle Atlantic Renaissance conference) の創立会員となったが、1960年にはアメリカ歴史協会の「ハーバート・バクスター・アダムズ賞」 (Herbert Baxter Adams prize) を受けた³⁾。また1989年には卓越した学者に与えられる「アメリカ歴史協会賞」 (American Historical Association Award for scholarly distinction) を授賞している。また彼女は「女性歴史家のバークシャー会議」のメンバーとしても影響力があったし、王立歴史協会 (Royal Historical Society) の会員でもあった⁴⁾。

キャロラインの研究対象

キャロラインの研究対象は、主として大ブリテンの、ウィッグの主流派に対して傍系の、しかしながら必ずしも周縁的というわけではない反対派、カントリ・ウィッグ、非国教徒の思想であった。ロビンズから示唆をえた後進の歴史家バーナード・ベイリン (1922-) は、ルイス・ハート (Louis Hart, 1919-1984) の『アメリカの自由主義』 (*The Liberal Tradition in America: An Interpretation of American Political Thought since the Revolution*, 1955) などのロックの影響を重視する自由主義的通説に挑戦して、ブリテンで非主流であった反対派、カントリ、非国教徒の共和主義思想こそアメリカ植民地ではロック以上に影響力が大きかったのであって、アメリカ革命はロック抵抗権以上にそうした知的伝統の産物であったという歴史理解を提出した。例えば、トレンチャード＝ゴードンの『カトーの手紙』 (1720-23) は植民地で広く読まれ、権力の強奪と独裁政治に反対したその議論はアメリカ独立革命の世代、すなわちアメリカ啓蒙の世代に、母国大ブリテンとの戦いの知的武器を提供したというのである。名著『アメリカ革命のイデオロギー的起源』 (Bernard Bailyn, *Ideological Origins of the American Revolution*, Harvard, 1967) がそれである⁵⁾。本書は一世を風靡し、アメリカ革命の見直しに道を開き、その後のウッ

ド (Gordon Wood, *The Creation of the American Republic, 1776-1787*, University of North Carolina Press, c1969) やウィルズその他の研究に受け継がれた。それはやがて「共和主義総合」というテーゼをもたらし、激しい論争を引き起こすことになる。

ライオネル・ロビンズの妹

キャロライン・ロビンズは、ロンドン経済政治学校 (LSE) の教授を務めた著名な経済学者、ライオネル・ロビンズの妹である。その事実はあまり知られていない。兄の自伝⁶⁾には妹が歴史家であることがさりげなく書かれている。それ以上の説明は一切ない。筆者は、座右の書としてながく親しんできたイギリス共和主義思想史研究の金字塔の著者が、ライオネル・ロビンズの妹であることを、ライオネルの自伝を監訳したときに初めて知った。

キャロラインの名著『コモンウェルスマン』には「兄への献辞」がある。「我が兄へ その絶えることのない愛情と関心がこれまでの私の人生をずっと支えてくれた。」そして謝辞の末尾に、父とともに兄、ライオネル・ロビンズへの感謝が明記されている。これを読み飛ばしていたのである。イギリスの経済学者とアメリカの政治思想史学者。改めて二人の写真を眺めると、恰幅の良い体型、ふくよかな容貌には共通のものがあるように感じられる。政治思想史はライオネルも好きな分野であったという。

ホーソン執筆の新 *DNB* (*New Dictionary of National Biography*) はその事実を記している。義理の兄弟姉妹を別として、ライオネルの兄弟姉妹のうち、生き残ったのはライオネルとキャロラインだけであった。ロビンズ家はバプティストであったが、キャロラインはバプティストの信仰を持てなかった。兄ライオネルもまた、母と妹の相継ぐ死の衝撃から信仰を失った。ロイヤル・ハロウェイからロンドン大学の博士課程に進んだキャロラインは、17世紀イングランドの詩人で共和主義者であったアンドルー・マーヴェル (Andrew Marvel) を研究したが、1926年に渡米してミシガン大学の歴史学のリッグズ研究員 (Riggs fellow) となった。

アメリカへの移住

当時、中産階級の独身女性がアメリカに渡ることは稀であった。なぜ妹はアメリカに渡ったのだろうか。一つの理由はイギリスよりアメリカのほうが女性にとって活躍できる場が広がったからであろう。女性解放ではイングランドはかならずしも先進的ではなかった。しかも1920年代の戦間期アメリカは、フレデリック・アレン (Frederick Lewis Allen, 1890-1954) が『オンリー・イエスタデイ』 (*Only Yesterday*, 1931, 筑摩書房, 1986年) で懐旧したようにブームに沸く「よき時代」であった。アメリカに迎えられた彼女は長きに亘って、熱心な教育者となり、こうして共和主義研究の優れた業績を残したのである。

ホーソンによれば、キャロラインは1924年からロイヤル・ハロウェイ・コレッジの歴史学におけるクリスティー・フェローシップを得ており、1926年には博士学位を得た。そして1年間ミシガン大学の歴史学のリッグズ・フェローを務め、さらにもう1年クリーヴランドのケイス・

ウェスタン大学の女子カレッジで教えた後、1928年には6ヶ月間イングランドに帰国している。しかし、イギリスの学界では「ライオネルが私より賢かったので、二人のロビンスの余地がない」と考えたキャロラインはアメリカに戻り、1929年からプリンマーで授業を始め、昇進をとげる。その間に、1932年にはアメリカ人の英語教師ジョー・ハーベン (Joe Herben) と結婚した。ジョーは兄ライオネルと同年齢で趣味が近く、フランス南部、バツハ、ブラームス、現代フランス語が好きだと兄に告げている⁷⁾。

ライオネル・ロビンス

ライオネル・ロビンス (ロビンス卿, Lionel Robbins, 1898-1984) は1971年に『一経済学者の自伝』(*Autobiography of An Economist*) を公刊した。先輩のケンブリッジのケインズの影に隠れることが多いが、彼はロンドン経済政治学校 (LSE) を独自の伝統の大学にした功績がある。LSEでのロビンスの最初の指導教授はラスキであった。ベヴァリッジなど多くの経済学者の影響下でロビンスは成長し、やがてLSEの中核を担うようになる。ロビンスはLSEをケンブリッジと対抗できる経済学研究の国際的な拠点とすることを目指した。ケインズを尊敬しながらもケインズの論敵となるフリードリヒ・ハイエク (『隷従への道』, 1944年) を招聘したのはロビンスである。ナチズムの影響下に入る直前に、ハイエクはオーストリアのウィーンを後にし、ロンドンへの招聘に応じた。

ロビンスは、あえて言えば、経済理論の体系的著作——イギリス人がTreatiseと呼ぶもの——を残さなかった。それに代わって、多数の著作と小著ながら名著とされる『経済学の本質と意義』(*An Essay on the Nature and Significance of Economic Science*, 1932) を刊行した。経済学 (Economic Science) を、希少性資源と個人の目的追求の関係としての人間行為の究明の学、言い換えれば、希少性を基礎とする財の生産と配分の効用の最適化を究明する科学として、いわば経済学の最小定義を行ったことで有名となった。

大戦間にロビンスはケインズの片腕として戦後の国際経済秩序の構想の形成に協力し、アメリカのブレトン・ウッズとホット・スプリングに赴いた。その時期に兄妹はブレトン・ウッズやペンシルヴァニアで何度か会っている。

その後、兄ライオネルがLSEの今日の基礎を作ったとすれば、妹のキャロラインはペンシルヴァニアの女子大で、旺盛な研究活動を展開し、また歴史研究の拠点創りに邁進したと言ってよいだろう⁸⁾。

II

『18世紀のコモンウェルスマン』

『18世紀のコモンウェルスマン』とはいかなる研究か。共和主義研究の金字塔である本書は18世紀の「大ブリテンの自由」——それは啓蒙のヨーロッパにあって知識人たちが憧れたもので

ある——に貢献した思想家の研究である。17世紀の先駆者の遺産をどのように継承したかという問題抜きに18世紀の思想に迫ることはできないから、17世紀のピューリタン革命後の共和主義者の思想も本書は当然射程におさめている。

イングランドは18世紀の植民地争奪でフランスに勝利し、19世紀には大英帝国を構築して、世界に君臨したが、社会の学問や政治思想の分野でも長く世界をリードしてきた。イングランド、大ブリテンの世界支配には搾取や圧政もあったけれども、文明を普及する側面もあり、民主主義の移植という面でロックやコモンウェルスマンによって生まれた思想がさまざまな影響を与えたと推察される。その意味では、現代にまで至る大ブリテンの思想的基盤を本書によって知ることができるとも言えよう。しかし、それにもましてコモンウェルスマンの豊かな貢献はそれ自体として知るに値する。それは17世紀のイングランド革命思想や自然権思想、18世紀のスコットランド啓蒙がそれ自体として知るに値するのと同じである。

コモンウェルスマンとは何か。それはリアル・ウィッグであり、共和主義者である(第1章)。したがって、トーリーやジャコバイトはコモンウェルスマンから排除されている。保守主義者のバークはロックインガム派のウィッグとして知られるように、アメリカとの和解を説き、経済改革を提唱した点で改革派の一面も持っており、コモンウェルスマンではないとしても、本書には登場する。

先駆的な17世紀のコモンウェルスマンとして登場するのは、ネヴィル、ハリントン、シドニー、ラドロー、ニーダム、ミルトン、マーヴェルである(第2章)。このなかでハリントン、シドニー、ミルトンは我が国でも比較的良好に知られており研究もある。ただし、翻訳で多数の著作が読めるのはミルトンだけである(ハリントンも抄訳⁹⁾がありはする)。シドニーとハリントンについてはいくつかの政治思想史研究があり、ミルトンには政治思想史から文学にわたるさらに多くの研究と翻訳がある。とりわけ『失楽園』や『アレオパジェティカ』、あるいは『離婚論』はよく知られているであろう。

そして名誉革命のウィッグ、コモンウェルスマンとして登場するのが、ロックとニュートン、ジェイムズ・ティレルとリチャード・カンバーランド、ジョン・サマーズ卿などで(第3章)、ロバート・モルズワースは別格で扱われている(第4章)。第4章に登場するのは、他にはトレンチャードとゴードン、トーランドとシャーフツベリなどである。このうち、日本語で接近できるのはほとんどロックだけである。

第5章はアイルランドのコモンウェルスマンを扱っており、モルズワースの他にモリヌークス、キング、マックスウェル、ドブズ、およびスウィフト、マッデン、バークリ、プライア、そしてグラタンとトーンにも触れている。アイルランドは日本では人気だが、それは文学に限ったことで、社会科学と思想史研究は遅れている。バークは別として、日本語で読める著者は、ユニークな思想家スウィフトと鬼才バークリの一部の作品だけであるのは、どうしてだろうか。スウィフトだけはわが国の研究も豊富である。

第6章はスコットランドを扱い、ブキャナンとフレッチャー、ハチスンとスミス、ヒューム、

ファーガスン、ウォレス、ブラックウェル、オグルヴィ、ミラーなどが登場する。しかし、1959年当時はスコットランド啓蒙の概念は未だなく、多くの思想家が薄明のなかに沈んでいた。ケイムズ卿、トマス・リード、ジョン・ウィザスプーンの扱いが軽いのは、時代的制約を感じさせる。サー・ジェイムズ・ステュアートもジェイムズ・ビーティーも登場しないが、しかし、リチャード・バロンに光が当てられている。フォーダイスにもウィリアム・トムにも言及がある。したがって、ロビンスの視野はスコットランドに関しても当時としては相当に広いといえるべきであろう。

言うまでもなく、わが国のスコットランドへの関心は熱いものがある。ハチスン、ヒューム、スミス、ファーガスンには翻訳があるし、サー・ジェイムズ・ステュアートへの例外的な関心も含めて、わが国のスコットランド研究には相当の蓄積がある。そのなかでもヒューム、スミスが、海外諸国でも同様であるが、別格の扱いを受けていることは言うまでもない。こうした思想家たちは今ではスコットランド啓蒙の思想家と呼ぶのが普通であるが、にもかかわらず彼らをロビンスのように「コモンウェルスマン」の概念で把握するのは、魅力的で新鮮でさえある。

第7章は非国教徒を取り上げた稀有な研究である。パーリントンとブラッドベリー、ニール、フォスター、ウォッツ、グローヴ、ドッドリッジ、そしてトマス・ホリス¹⁰、ブランド・ホリスなどが興味深く描かれている。

第8章は、ジョージ2世(1727-1760)時代を扱い、ベンジャミン・ホードリヤトマス・パウヌルが特筆され、第9章はフランス革命までのジョージ3世時代の急進主義を対象としている。ブラックバーン、プライス、プリーストリなどである。プライスとプリーストリはわが国にも研究がある。彼らの敵、バークは主にこの章で論じられている。

このように一部はわが国でも研究がされているけれども、重要な思想家でありながら多くはまったく研究がない人物が本書の主要な対象なのである。しかも英米でも十分な研究の無い人物が多い。こうしたコモンウェルスマンが時代と系譜によって区分され、それぞれのグループやサークルのなかでの個々の思想家の思想、役割について簡潔かつ具体的に、明確な描写が行われている。その博識と分析の手堅さ、鮮やかさは半世紀以上たった今でも色あせていない。個々の思想家の業績を暗闇から浮かび上がらせるキャロラインの手腕と独創性は際立っている。

したがって、17世紀末から18世紀の末までのイングランド、アイルランド、スコットランドの思想史研究の基本文献としても本書は参照に値するであろう。さらに不十分ながらアメリカにも射程は伸びている。アメリカは独立までは植民地としてアイルランドと同じく、大ブリテンのプロヴィンスであり、コモンウェルスを形成していた。アメリカのコモンウェルスマンとして、フランクリンやパウヌルが取り上げられているし、トマス・ホリスとアメリカ人との交流にも言及がある。

時代の文脈

『コモンウェルスマン』は1959年という年に初版が出た。戦後アメリカはどのような時代であったか。1959年というのはマッカーシズムが退潮してから数年しかたっていない時である。戦後のアメリカには朝鮮戦争からソ連との対立、核武装と冷戦へと不穏な展開が待っていた。自由主義を守るという大義名分のもと、ソ連との対抗がアメリカの戦略となった。30年代以来、ヨーロッパからのユダヤ系知識人のエミグレを多数受け入れたこともあって、戦後のアメリカには社会主義者や共産主義者が多数いた。この時期ニューヨーク知識人の多くは社会主義に希望を抱いていたのである¹¹⁾。FBIと下院非米活動委員会はアメリカにはソ連のスパイが多数いるのではないかとの疑いのもと活動をしていた。こうして国家機関、大学、ジャーナリズム、さらにはハリウッドまでを標的とする、狂気とも言うべき左翼知識人駆りが10年以上にわたってアメリカを席卷したのであった。その頂点がマッカーシズムであった。ブレトン・ウッズでケインズおよびライオネル・ロビンズと対決したアメリカの財務次官補ハリー・デクスター・ホワイトは、1947年にソ連のスパイを疑われてFBIに喚問され、その翌年に下院非米活動委員会によっても召喚されたが、スパイ行為を否定する証言を行った二日後に心臓発作で急死した¹²⁾。またハーバート・ノーマンが同じくスパイと疑われ、カイロで自殺したのは1957年のことである。こういった政治の動きをロビンズがどう見ていたのかはわからないし、それが『コモンウェルスマン』に影響があったという証拠もない。しかし、時代の文脈として、『コモンウェルスマン』を読むときには念頭に置いておくべきであろう。この時期のアメリカの反共イデオロギー、思想的不寛容について、ロビンズがどう受け止めていたかは想像に難くない。

Ⅲ

「アテネウム版のまえがき」(1968年)より¹³⁾

ロビンズはその後、ペーパーバック(アテネウム版、1968年)を出し、それに初版の不十分さを語った「アテネウム版のまえがき」を添えており、そこでは実はもっと壮大な研究プランがあったことが語られているし、その後の研究の展開への言及がある。

まず本文の間違いを訂正する機会となったこと¹⁴⁾、また10年近く経つので、主題の取り扱いにも若干の反省があると語ったロビンズは、いくつかのことを指摘している。

第一に、主題をブリテンの材料に限定したことについてである。当初はヨーロッパ大陸の類似の人物や理論も調べ、書物の一部にしようと思っていた。宗教的自由の成長の研究、例えばソルターズ・ホールのお話りと国教信奉の署名(subscription)についての論争はオランダ諸国とジュネーヴでの論争と結びつけられなければならないものだった。また最上の政体の分析は、共和政ローマへの郷愁を伴うものであれ、ゴシックのヨーロッパへの郷愁を伴うものであれ、フランス革命の時期まで、ブリテンと同じくヨーロッパでも頻繁に見られた。宗教の自由と市民的自由を説く論者は、同じ権威に訴えた。ヨーロッパ人もまたウィッグのキャノンとコモン

ウェルスマンを読んだのである。彼らは同じ聖書、古典、ルネサンスの書物を読み、影響を受けた。島々と大陸は彼らを守ったが、孤立させはしなかった。コモンウェルスマンを読めば、自身と隣人の共通の起源、制度、知的遺産が分かった。18世紀のブリテンは自由と安定を大いに確保したが、そのことはブリテンの発展をヨーロッパ史の全般的な流れと乖離させるものではなかった。けれども、ブリテン諸島の共和主義思想の主要な流れを跡づけ、それをヨーロッパの思想と出来事のより大きな環境のなかに位置づけることは、小著ではきわめて困難であった（これはその後、部分的にはヴェントゥーリやポーコックによって行われていると言えるかもしれないが、十分に果たされたとは未だ言えないであろう）。こうして本書ではメトロポリスの幾人かの人物に集中するのではなく、アイルランド、スコットランド、イングランドの人物と状況を論じたのである。

第二に、思想のカテゴリーではなく、個々の人物や集団を扱うことにしたが、それは徐々に決まったことだという。様々な形態の契約、自然権、政党ないし党派、腐敗、議会の役割と性格、内閣の性格、権力分立などは、説明も必要なら歴史的取り扱いもしなければならぬ。そうしたことを考慮した結果、思想の伝播を取り上げ、コモンウェルスの思想を研究し、それについて書いた人物に集中することにしたというのである。

例えば、自然権や契約理論については優れた書物が書かれてきた。本書以後に、権力分立については第一級の書物が2冊出ているとして、ロビンズはグウィン『権力分立の意味』(W. B. Gwyn, *The Meaning of the Separation of Powers*, Tulane, 1965) とヴァイル『国制主義と権力分立』(M. J. C. Vile, *Constitutionalism and the Separation of Powers*, Oxford, 1967) を挙げている。前者はコモンウェルスマンの時代に関連があり、後者は17世紀からイングランド、フランス、アメリカの現在までの理論の発展に集中している（この種の研究はその後、多数の優れた書物を生んでいると思われる）。この二冊が確信させるのは、こうしたより広い研究は政治理論によりふさわしい扱いであり、歴史においては、人物は出来事のコンテクストにおいて研究されねばならないということである。

第三に、当初はジョージ3世の即位で終わるつもりであった。そのころまでウィッグ・キャンノンが利用されたことは明白で、ステュアート家との紛争の期間の理論の繁栄とアメリカ植民者との抗争の勃発までのあいだに存在したギャップは、少なくとも一部は埋められるように思われた。しかし、結果として、1760年以降のイングランドのいくにかを取り上げずにそこで中断することはできなかった。というのは、彼らは共和主義を力強く復活するだけでなく、いっそう発展させ、それまでの聖者や殉教者への植民地の熱狂を共有し、権利の侵害への抗議を支持したからである。それでもトマス・ペイン——ロビンズは常に惹きつけられると述べている——についての議論は意識的に省略したし、革命と国家建設期のアメリカのコモンウェルスマンの思想を描く手前で終えた。それには別の書物が必要だったからである。

アメリカについてはベイリン (*The Ideological Origins of the American Revolution*, Harvard, 1967) によって本書が果たさなかつた研究が見事に行われており、また今後の研究に期待でき

るとロビンズは明言している。アメリカにおけるその後の共和主義研究が、多数の研究者によって精力的に進められたことは言うまでもない。

ロビンズはさらに続けている。ベイリンは世論の風土と政治理論の性格の変化を調べている。その点は19世紀の西側のいたるところで著しい。この思想の革命と政治問題への接近法の変革においてアメリカは指導的役割を果たした。トマス・パウヌルなどの観察者は、社会の進화가、イングランドとの紛争が勃発する以前においてさえ、アメリカでは階級と階層的な差別の考慮によって支配されることがはるかに少なかったという事実気づいていた。フランス革命のあいだに新しい掛け声と異なる態度が現れており、それは財産=所有権にもわずかに関連していた。ベンサム主義者、ジェファソンの弟子、ジョン・テイラーの読者のあいだで、道徳的な考慮と多数の基準が古い定義や政治概念に取って代わった。思想の転換があったのであるが、にもかかわらず、1787年のフィラデルフィアでの論争（大陸会議でフェデラリストとリパブリカンが連邦共和国の建設を巡って論戦を展開した）や19世紀の急進的文献には、コモンウェルスマンの著作の反響の多くが見られる。従来の自由至上主義的哲学者が民主主義的信念を持つようになるこの変化は、「均衡」、混合政体の効能、エリートのような考察を呑みこんでしまったが、それもまた1巻が必要である。したがって、思想的連続性があるのだが、アメリカでの議論は本書では扱えなかったというのである。

パークリ主教とボリングブルック

次にロビンズが述べていることはデイヴィッド・ヒューム、サミュエル・ジョンソンについては詳論しなかったが、ジョージ・パークリ（パークリ主教）について詳論した理由である。すなわち、共和主義思想を発展させた人々を選び出すにあたって、周縁的人物を排除することは困難であり、また反対派の政治・戦術と自由主義思想を区別することも困難であった。けれども「ケース・スタディー」こそ思想史研究で最も有益である。『コモンウェルスマン』はコモンウェルスの理念に希望を抱き、その理念に寄与しようとした人物を対象としたが、また社会と国制に欠陥を見出しその解決策を提案した若干の人物も対象とした。したがって、デイヴィッド・ヒュームの詳論は省いたが、パークリ主教についての十分な議論を含めたいという誘惑にはあがえなかった。パークリとジョンソン博士は貧民の安寧に心底から関心を持っていた少数者の2人であった。博士は軽く扱ったが、パークリの『質問者』は無視できなかった。

最後に、ボリングブルックの扱いについての弁明がある。「旧ウィッグ」、すなわち、コモンウェルスの伝統のなかで著作を書いたトーリーのヘンリー・セント・ジョン、ボリングブルック子爵を省いたことは、反論を招いた。彼のウォルポール政権批判、党派分析、歴史の省察、腐敗の断罪は「ウィッグの歴史」とウィッグ政治論を彼に利用させたのであった。彼は大西洋の両岸で広く読まれたし、ウィッグの思想の影響の拡大に寄与した。哲学的著作には欠いている、彼の輝ける文体が論争的著作を飾っており、広く読まれた理由でもある。腐敗、大臣・ジャント・君主の不当な影響力、獵官と廷臣についての叫び声は常にありふれた声だった。

アンドルー・マーヴェルはダンビー伯爵とチャールズ2世に反対する声を挙げた。トレンチャードとハーリーは、ウィリアム3世の治世におけるウィッグの勢力増大に対して反対した。ボニー・プリンス・チャーリーは、最後のジャコバイトの反乱（1745年）に乗り出したとき、何を約束するかに言及したと言われており、そのなかには常備軍の断罪、毎年議会、政治の純化、市民的・宗教的自由の保障が含まれていた。議会でも『クラフツマン』などの反対派の定期刊行物でも、旧来のコモンウェルスマンの多くのスローガンが見出しうるが、その対立者に改革者と言えるようなものはいなかった。職にあずかれなかったものは民衆の叫びを利用した。職務に就くと違う。

ボリングブルックは無職の時は、すべてのこうした不平の声を挙げた。しかし、彼は国制を改革するつもりなどなかった。彼は国家という船を新しく建造する人間ではなかった。社会の病理を解決する計画もなかった。18世紀のコモンウェルスマンの重要性は、自らの伝統を堅持しただけではなくそれを発展させたことにあるが、「愛国王」の自惚れはそうするものではなかった。したがって、ボリングブルックは省略できるというのである。

彼女によれば、将来、コモンウェルスマンのより優れた研究が生まれるであろうし、それらは彼らに対して違った取り扱いをするだろう。「私の間違いや省略によって、私は利益を得ることを願っている。書評や、批判、興味深い情報をもたらしてくれた多くの人に感謝している。

IV

ロビンズは、1968年にこのような反省と展望を語ったが、それから半世紀になろうとしている現在、すでに実現された課題もあれば、未だなされていない課題もある。個別研究として、ヒューム、ボリングブルック、ペイン、パウヌル等の研究は大きく進んだが、ジョン・テイラーはテキストこそ出ているものの、ポーコックによる言及を別として、未だ十分な研究はないように思われる。もとより、筆者の知る範囲は限られているので、このような認識は間違っているかもしれない。いずれにせよ、2015年の時点で、ロビンズの仕事を研究史に位置づけることも、厳密には容易な仕事ではないのである。しかし、共和主義が今では蘇ったことは確かであり、そのことこそ注目すべきであろう。けれども共和主義が何であるかは、わが国では必ずしもよく理解されているわけではないと思われる。

共和主義とは何か

共和主義とは何か。自由主義とどのように違うのか。民主主義とはどうか。これらはともに本来は、専制政治、独裁を敵とする政治思想である。共和主義は「積極的な自由」の概念に関係が深い自立の思想であるのにたいして、自由主義は消極的自由の概念に立脚する。共和主義と民主主義は近いようにも思われる。有徳な市民が支える民主主義や自治の思想は一種の共和主義と言えるであろう。「徳なき自由主義」は常に腐敗の危険性をはらんでいるから、共和主義

者が説く徳によって支えられる必要があるだろう。

フランス革命後、19世紀以降の近代史は動乱の連続、国家間の国際紛争としての戦争と平和の繰り返しであったが、それはイデオロギーの対立に染め抜かれた歴史でもあった。ナショナリズムとマルクス主義は強力なイデオロギーであり、ある種の魔力ある価値体系であった。ナショナリズムとインターナショナリズム、自由主義対社会主義、あるいは社会民主主義との対抗関係が先進的な世界各地で展開した。

それに先立って、啓蒙のヨーロッパでは専制対自由の対抗があり、その時の自由主義は共和主義的であった。すなわち、歴史的にみて、政治的自由、公共の自由は専制・独裁との戦いによって勝ち取られねばならなかったが、そこでは共和主義と自由主義は未分化な共同戦線にあって絶対君主の独裁と対決したのである。共和主義は民主主義とも関連するが、そこには緊張関係があった。自立の思想としての貴族的な共和主義は依存的な大衆民主主義と融合できないであろう。

共和主義は共和政体と徳と公共の自由の体系となり、自由主義は権力と圧政からの政治的・経済的・宗教的自由の思想として純化されていく。また民主主義は民主政と平等により重きを置く思想となる。相互に関連する三つのイデオロギーは、おおよそのところ、このように分化して行ったように思われる。それはコモンウェルスマンの思想の解体とみることもできるだろう。それはよき社会のイメージの差異の分極化と言ってもよい。そして伝統を重視する保守主義もロマン主義も次第に明確な思想として姿をあらわす。

それでは、「よき社会」とはいかなる社会か。共和主義から浮かぶイメージは、市民が活動的な自治を行なう社会である。自由主義の場合は、権力による抑圧が最少で個人の自由な活動を容認する社会である。民主主義は、成人が主権者として自治を行なうか代議政治を通じて権利を行使し、人びとが平等で大きな格差がなく暮らす社会と言えるだろう。そして社会主義は、本来は、「自由人の連合」として、民主主義の延長にあるモデルであったが、現実に成立した社会主義社会は独裁政権（プロレタリア独裁）を生みだし墮落した。権力は不可避的に墮落する（アクトン）。

20世紀に広まった後進国の社会主義は民主主義が未成熟であるために開発独裁になりがちであった。アレント『全体主義の起源』（1951年）と東欧社会主義の解体（1989年以降）を前提として言うと、国家社会主義（国家動員体制＝全体主義）にはスターリン型とナチス型があったと言えるであろう。文化大革命なる粛清を敢行した毛沢東の中国はスターリン型であった。日本の軍国主義はどうだったか。違いも大きいですが、軍部の暴走と翼賛体制においてナチズムに似た点がある。

近代史に善と悪、あるいは進歩派と保守反動の対立を見るのは、ありふれた通俗的歴史観であるが、それはまったく間違っているとも言えないであろう。この世に善と悪は存在する。保守と革新は常に存在する人間精神の二側面でさえる。古来、神と悪魔の戦い、天使と狼の戦いは、人間理解に影響を与えてきた。善と悪との戦いは個人のなかでも、社会のなかでも、そ

して世界のなかにも存在し、歴史を貫通している。ただ、社会のなかでは何が善で、何が悪か分からないことが多いのも事実である。そして集合現象のなかでは個人の意図は歪められ、意図せざる結果を導くことが多い。

社会主義を取り込んだ民主主義を社会民主主義とすれば、19世紀の後半のフェビアン主義などにその起源はあるが、20世紀に入ってから強くなったイギリスとヨーロッパの社会民主主義は、豊富ななかの失業と貧困という資本主義の矛盾を克服するものとして登場した全体主義的な国家社会主義——ナチズム、ファシズム——に対抗したものの、経済の危機を克服できず、一方1930年代から40年代にかけては国家社会主義が成功するかに見えた。経済の危機を克服すべく、ケインズは『一般理論』を1936年に世に問うた。それは英米のみならず世界の知識人から大歓迎を受けた。経済は本来不均衡を本質としており、有効需要の創出などの政策的介入によって失業や不均衡を緩和・解消しなければならないと主張する『一般理論』は国家社会主義を批判したものではないが、政府の政策権限を重視した計画思想として社会主義に親和性があった。

全体主義を葬ったのは西欧の生産力、とりわけフランクリン・ローズベルトのアメリカの決断であり、アメリカの富と軍事力であった。チャーチルの指導力¹⁵⁾ やソ連の抵抗も重要であるが、アメリカの参戦が国家社会主義を崩壊に導いたのである。二度の大戦におけるアメリカの貢献は特筆すべきものであろう。こうしてアメリカに支援されたヨーロッパとイギリスにおいて社会民主主義は20世紀の後半に再登場した。労働者と知的階級に軸足を置くものとして、社会民主主義は修正資本主義、福祉国家を目指した。

戦後になって権力の座についたものの、労働組合に軸足を置くイギリスの労働党は政策的に福祉重視で硬直し、産業の不振をまねいたとして支持を失った。こうしてサッチャーからメイジャーへと長い保守党支配が続いた。その後、トニー・ブレアによって復活した労働党は、保守党に接近した自由主義政策を採用したが、それは硬直した福祉を見直さざるを得なくなった時代の趨勢であった。

過剰な福祉に挑戦した反知性主義的な自由主義の復活が見られたのが1980年代(サッチャー、レーガン、中曽根) だったとすれば、それから30年以上を経た現在は、グローバル市民社会の時代になりつつある。環境問題をはじめとしてグローバルな課題が噴出している。そのためにはグローバルなコモンウェルスの実現こそ目指すべき方向であろう。

現在のところグローバル経済はアメリカと中国が大きなプレイヤーとなっており、残りはこの両大国にふりまわされている。抑制のない国家利害が暴れている世界は危険である。平和な繁栄という理念に導かれて、個別利害が調停され、協調が実現されるのが望ましい。それにはコモンウェルスの思想、すなわち共和主義が参考になる。徳もバランスも協調も共和主義の語彙であった。自由と共存のための知恵は蓄えられている。組織としては国連が協調を先導しなければならないであろう。ヨーロッパ共同体(EU)も困難な諸問題に直面しているが、世界政府に向かう歴史的に先駆的な挑戦を続けるであろう。

政治はいつの時代にも権力と自由を焦点とする。経済学は富の学である。倫理学の価値は善であり、法学は正義を、あるいは権利と義務を核心とする。政治に関係が深い共和主義は、共和政体と徳をキーワードにする独自の政治思想であり、社会思想である。自由の共和主義的定義は政体（独裁でないというのが特徴で、共和政体から混合政体、制限政体まで含まれる）と徳（自立・独立の意志と行動）によってなされる。

専政に対立するものが共和主義であるから、君主がいる共和国もありうる。共和主義者にとっては自由が眼目だから、政体は絶対的基準ではなく、混合政体でよいのである。モンテスキューはイングランドの国制を論じて、それを一者、少数者、多数者からなる混合政体、あるいは穏和な政体、制限政体と捉えた。共和国は有徳な貴族が支配してもよい。徳は腐敗を克服する力である。しかしながら、政治に腐敗はつきもので、人間は腐敗しやすい。権力も腐敗する。マキアヴェッリは統治者に力、ヴィルトゥを求めた。それなしには安定した支配は不可能であると見た。統治者に徳がないとき、腐敗が進み、政治は不安定となり、戦乱となり、臣民を不幸にする。有徳な統治をマキアヴェッリは偉大さと結びつけた。しかしながら、秩序を徳で形成し、安定を徳に委ねる思想は、そもそも脆弱たらざるを得ない。その点に留意して制度へと力点を移したのが、ロックや、モンテスキューであり、ヒュームである。

共和政体、共和国は徳に支えられる。しかし徳は腐敗しやすい。変化は腐敗の別名であった。共和政は諸身分のバランスに負う点が多い。しかし、バランスと安定を維持することは容易ではない。人間は歳を取るし、世代交代は変動要因となる。社会発展は統治のバランスを壊す。財産のバランスが政治のバランスを変える。そのことをハリントンは土台が上部構造に影響を与えると見てとった。ハリントンの共和主義はロックの権力分立論とともにコモンウェルマンに受け継がれた。

コモンウェルスマン、共和主義者は自分の基盤となっている祖国や郷土の自由と繁栄を目指す、思想と行動の人である。ロバート・モルズワースはアイルランドの愛国者として後進を育成したから、教育者でもあった。彼らは決して右翼や保守ではなく、自治と自由の擁護者なのである。モンテスキューは共和政体を徳、平等、清貧で定義したが、それは必ずしも大ブリテンの共和主義者の思想には当てはまらない。また多くの共和主義者は平民である以上に下級の貴族であり、上層の市民階級であることが多かった。共和主義者は自由人を同輩と見なしたが、階級の廃止などは考えなかった。彼らはまた19世紀以降の社会主義者とも違う。そもそも共和主義は大衆社会には適しない、というより大衆社会に敵対する思想である。大衆社会にあって精神の貴族を説いたオルテガは、ある種の共和主義者であったと言えるかもしれない。

V

その後の共和主義研究の発展

ロビンズが種を撒き、ポーコックが大きく育てた共和主義の研究は、大きな潮流となった。1990年頃から共和主義関連文献が特に英米で、また独仏伊でも、たくさん出るようになった。

人々は徳の重要性に改めて気付いた。フランシス・フクヤマは歴史の終焉を語ったが、歴史が終焉することはない。共和主義は、体制や政体を相対化し、腐敗との対決の重要性を指摘し続けた。共和主義が目覚ましく復活したのは1990年代以降かもしれないが、それは市場経済が計画経済に勝利したとしても、政治も経済も変動を繰り返すことに変わりはなく、常に自由を維持するのは困難な営みであることに注意を喚起した。自由の困難な歴史に目を向けるのが共和主義である。今隆盛を迎えている共和主義研究の最大の礎石を置いたのが、『コモンウェルスマン』なのである。

ロビンスの仕事にも刺激を受けたJ・G・A・ポーコックの傑作『マキアヴェリアン・モーメント』(*The Machiavellian Moment*, Princeton U.P., 1975)はロビンスの4半世紀後に刊行され、やがて各国(イタリア、フランス、スペイン、日本など)で翻訳されていく。さらにその4半世紀後にヨーロッパの共通の伝統をうたった浩瀚な共和主義研究が出る。ゲルデレンとスキナーの共著『共和主義——ヨーロッパの共通の遺産』がそれである(Martin van Gelderen & Quentin Skinner eds., *Republicanism: A Shared European Heritage*, 2 vols, Cambridge U.P., 2002)

徳なき社会の分析はマッキンタイアの課題でもあった(Alasdair MacIntyre, *After Virtue*, University of Notre Dame Press, 1981. 篠崎栄訳『美德なき時代』みすず書房, 1993年)。徳なき社会はアメリカだけではない。世界的な反体制思想の没落と、政財界のエリート集団のとめない腐敗。中東やアフリカでの独裁政権と内戦、テロリズムの広がり。混沌と腐敗の世界的な広がり直面して、人間本性の欠陥を嘆くだけではなく、困難な課題に倦むことなく取り組む行動が必要である。それを卓越と呼ばなくてもよい。称賛しなくてもよい。重要なのはよい社会を作ろうとする共和主義の精神に学ぶことではないかと思われる。

ロビンス、ポーコックに始まる浩瀚な共和主義研究を我々は今日もっているが、その他、膨大な共和主義研究が生まれている。こうして、今日我々は、共和主義についてかつてないふんだんな知識に出会っている。21世紀の社会は国民国家の枠を超えてグローバル化が進んでいる。とはいえ、今もお国家は制度として重要な役割を果たしている。それぞれの領域の共通の文化を基礎として、国家は公益・公共善なるものを守ろうとする。しかし、国家を超えたグローバルな人と財、情報あるいは文化のますます激しい移動が展開しているのが21世紀の世界である。グローバル社会を発展させ、安定させるために、さまざまな国際機関が生まれ、国際公共社会が制度化されてきている。今日、安心して人々は自由に移動できるようになった。世界的な社交性の時代が生まれようとしている。

こうした移動を阻む必要はない。国家はテロリストの入国を阻止しようとする。テロリストはもとより、排除すべきである。同時に、どうすればテロリストを生まない社会になるかを考えなければならないだろう。被抑圧者や不満分子がテロリストになることをすべて阻止することはできないだろう。しかし、彼らを減らすことはできるはずである。プリテンの支配に長い抵抗とテロを繰り返したアイルランドのIRA(アイルランド共和国軍)が停戦に応じたのはさほど昔ではない(2005年)。

かつて共和主義者も独裁者、抑圧者を憎み、テロルや暴力に訴えたことがある。『コモンウェルスマン』に登場するラドローがそうであった。愛国者は非暴力主義者であったというわけではない。むしろ愛国者もまた最後の手段として暴力に訴えることがあった。フランスのカネで王政復古体制を転覆する陰謀を画策したアルジャーノン・シドニーは、目的のために手段を選ばなかったために、反逆者となったが殉教者ともなった。スコットランドの独立をどこまでも追求した愛国者、アンドルー・フレッチャーはスコットランド議会の議員でもあったが歴戦の戦士でもあった。権力の正統性が争われる場合は、紛争はしばしば闘争となり、内乱となる。

マキアヴェッリやグイッチャルディーニが、戦乱のルネサンス・イタリアで復活した共和主義は、政治的闘争——権力闘争——のなかから生まれ、政治的動乱を生き抜いた思想である。自由や富といったよきものが抑圧されている専制国家では、人々は必然的によきものを求めるから、体制崩壊がいずれ起こる。それはいつとは予測できなくても、必ず生じる。共和主義者は民兵となる場合もあれば、体制変革にコミットすることもあり、そうした場合は革命家となる。アメリカ独立戦争にはラファイエット将軍がフランスから独立軍に加勢した。スペイン人民戦線はフランコの軍事独裁に対する自由主義者、民主主義者、共産主義者の戦いであったが、イギリスの若い社会主義者や共和主義者もまた義勇兵となって加わった。

そもそも政治という活動は公共善の実現を目指す、高貴な活動であった。しかし、それは権力闘争を通じて支配権を手に入れることなしには済まない活動であるから、成功する保証もなければ、選挙活動を通じて、あるいは選挙民や党員との関係で、腐敗や墮落に直面することが時に避けがたい。人間は完全な存在ではないから、完全な政治を実現することは夢であろう。シヴィック派の研究者であったマイケル・イグナティエフ (Michael Ignatieff, 1947-) がカナダの首相を目指して苦渋の経験を舐めた¹⁶⁾のは、ある意味で、当然の結果だったかもしれない。思想と現実政治には容易に埋めることができない距離が存在する。

もとより、現代の政治や社会と18世紀大ブリテンの政治や社会を同一してよいというのではない。時代が違っても、18世紀のコモンウェルスマンが取り組んださまざまな課題への多様なアプローチは、『コモンウェルスマン』によって、見事にその輪郭が描き出されている。ここには驚異的な思想家の営みがある。現代人もそれを知って糧とすることができるであろう。

注

- 1) 本稿には、既発表の「ライオネル・ロビンズの生涯と思想—『一経済学者の自伝』より」(愛知学院大学経済学会『経済学研究』第1巻第1号, 2013年9月)を一部利用した。
- 2) *Absolute Liberty*には1936-1980年のロビンズの著作目録がある。著書・編著と論文など63点, 書評148点。
- 3) 1905年に協会の創立会員で、初代の事務局を担ったアダムズ (Herbert Adams of Johns Hopkins University)を記念して設けられた賞で、ヨーロッパ史に関する英語での著作に与えられた。
- 4) Obituary by Jack Pole, *Guardian*, 16 Feb. 1999による。
- 5) 1998年に、たまたまボストンに出張したことがあったが、そのときに筆者はハーヴァード大学のアメリカ史研究所にベイリン教授を訪ねた。彼はロックの重要性も否定せず、今では少し見解を修正していると語った。
- 6) ライオネル・ロビンズ『一経済学者の自伝』ミネルヴァ書房, 2009年。

- 7) Susan Howson, *Lionel Robbins*, Cambridge U.P., 2011, p.143, 234. キャロラインがハーベン姓を名乗らなかったのはなぜだろうか。
- 8) ロビnzのプリンマー・カレッジでは1952年にアイザイア・バーリンが「ロマン主義時代の政治思想」について4回の講義 (Mary Flexner Lectures) をしている。それは半世紀以上後によくまとめられ、Isaiah Berlin, *Political Ideas in the Romantic Age*, ed. by Henry Hardy, Princeton University Press, 2006となった。「ほんやりしか分からない、半ば黒い聴衆」(p. xiii) のなかにロビnzはたぶんいたであろう。この講義はバーリンが「消極的自由」と「積極的自由」の区別について初めて論じた講義である。この段階では自由は「自由主義的」と「ロマン主義的」として区別されていた。この講義についてはイグナチエフが言及している。M. Ignatieff, *Isaiah Berlin: A Life*, Metropolitan Books, 1998, pp. 201-2 (石塚雅彦・藤田雄二訳『アイザイア・バーリン』みすず書房, 2004年, 220-1頁)
- 9) 田中浩訳『世界大思想全集 社会・宗教・科学思想篇2 ホップズ・ロック・ハリントン』河出書房新社, 昭和37年(1962年)所収。
- 10) トマス・ホリスについては筆者の「トマス・ホリスとアメリカ独立革命」(愛知学院経済学会『経済学研究』第1巻第2号, 2014年3月)を参照されたい。これはキャロライン・ロビnzから示唆された論考である。
- 11) 堀邦雄『ニューヨーク知識人』彩流社, 2000年。
- 12) ケインズとホワイトの対決は、ベン・ステイル『ブレトン・ウッズの戦い』(小坂恵理訳, 日本経済新聞社, 2014年)に詳しい。ライオネルもまた二人の対決の場にいたが、その事情をライオネルはキャロラインに語ったであろう。
- 13) *The Eighteenth-Century Commonwealthman*, New York: Atheneum, 1968, pp. vii-xi.
- 14) 修正はわずかで、頁数に変化なく、増補改訂版ではない。
- 15) ジョン・キーガン『チャーチル 不屈の指導者の肖像』(富山太桂夫訳, 岩波書店, 2015年)特に第7章以下(123ページ以降)を参照。
- 16) 彼の回想記『火と灰』風行社, 2015年に詳しく語られている。